

# サバイバル考

古家秀美

水の流れは留まらず、人の愁いも尽きぬやら  
どうせこの世が不快なら、明日から逃れて無人島

『ロビンソン=クルーソー』や『十五少年漂流記』等の冒険物語、或いはパニック映画といった様々なサバイバル的空想が氾濫する環境の中で少年時代を過ごした者達が、無人島生活に憧れ、ジャングル彷徨を夢見て探検部に集う。このような活動は、探検の一般的イメージにピッタリであり、事実、新人の殆どがサバイバルを志して探検部に入部した者である。

しかし、彼ら冒険少年達の志を満足以受け止めるに足る目的・方法論は、ことサバイバルに関しては確立されるに至っていない、というのが我部の現状である。

もちろん、今までにサバイバルを試みた者はいる。1978年夏の西表・外離島生活実験もその一つである。絶海の名も知らぬ孤島に漂着した後、水と食糧を安定確保し、住居を作り、道具を作り、島を探検し、動物と仲良くなり、最後には船造って脱出する——我々4人が経験したサバイバル合宿は、無論こんな小説や映画に出て来るが如き、スリルやロマンに富み、且つ何もかもがうまく運んで行くといったものではなかった。暑さと飢えと、そして単調という或る意味では最も苛酷とも言える条件の下に置かれた我々が得た結論は、C

L、井上20代OBの次の言葉に象徴的である。

「何日間という一定の期間を指折り数えて堪え忍び、その期間が終る事を楽しみにして、その日が来たらビールを飲んで肉を食べて……これではサバイバルではなく我慢大会である。」

探検部という組織内の活動としてサバイバルを捉えた場合に問題となるのは、本当にサバイバル的条件を設定することが可能なかどうか、もし可能ならばその極限はどこに決めるべきなのか、ということである。まさか落ちる飛行機や沈む船に偶然乗り合わせるまで待つ、という訳にはいかない。と言って、我々がそんな条件を故意に設定するならば、その場合には安全対策が要求される。医療、非常食を待参し、更に連絡体制まで整った安全なサバイバル、その様なものが存在するはずがない。極悪条件をフィールドとして求める方向でのサバイバルは、クラブ活動にはなじみにくいと考える方が良さそうなのである。ただ、探検マンとして、こうした悪条件克服の活動を経験しておくべきであるという考えから、クラブ全体で野草料理やビグワークのトレーニングを行うことは定着しつつある。だからこの種のサバイバルも、あながち探検部と無関係という訳では無いようで

あるが。

それでは探検部に於けるサバイバル合宿の方向は？ 冒険少年達の夢はいずこに？ ここでは2つの方向を考えてみたい。

一つは、サバイバル状態に於ける人間の意識・行動を探る、という方向である。地震、爆発等、自然、人為に拘わらず我々は常にこうした危険と隣り合わせに生活している。そこで、その危険に対する人間の潜在的意識と顕在的パニック行動を対象として、心理調査を行うのである。

いま一つは、今年の夏に行われた「知床半島一周」で一步を踏み出した「サバイバル踏査」の可能性である。これは、山岳から調査まで、広汎な「踏査」活動全般に於て、その食糧、装備面にサバイバル的要素・方法を取り入れて、発想の転換・装備の軽量化をはかることにより、行動範囲を広げ、活動能力を高めることができないか、という意図で掲げた命題である。そのため一昨年5月の野草を食糧とした北山山行を始めとして、海魚中心の或いは川魚中心の活動、さらに装備面でのサバイバル等を行ない、今夏の知床半島合宿で一応の成功を見たわけである。

今後は海外に於ける可能性を求めてより一層充実した活動が行なわれることであろう。ただ、サバイバル踏査ということ自体はあくまでも手段であり、それを確立した後、その効果を十分に発揮できるようなフィールドを早く見つけることが必要となる。

探検部に於けるサバイバル的活動が今までコンセンサスを得られ難かった状況として、もう一つ、活動自体が単発・自己満足的に終わり、将来の方向性を持つに至っていないかったという事が考えられるわけであるが、「サバイバル踏査」はその意味でも探検部になじみ、更に言えば無くしてはならない分野であると言える。何となれば、サバイバ

ル(生き残る)とは常に何かに飢えた状態であり、飢えるということこそが、発想や進歩の原動力なのだから。

このように探検部に於けるサバイバル活動の方向性を考察してみたわけであるが、果たしてこれが冒険少年達の夢を満足させるものであるかどうかは分らない。ただ、サバイバルを志したからには、それこそ“NEVER GIVE UP”の精神を持って、自分の夢を実現させる為に頑張っ欲しいと思う。

(22代)

